

復興に全力を尽した松平伊豆守信綱

市民学芸員 池田 恵寿

今年の家康没後400年を記念する番組が連日放送されています。

日常の生活で、忘れがちになる旧領主の偉業を振り返ろうと思い立ちました。江戸時代に富士見市域の半分を治めていた川越藩の松平信綱です。

信綱は、慶長元年(1596)、代官頭伊奈忠次に属する代官、大河内久綱の長男として出生。6歳のとき、松平正綱の養子に、9歳で家光の小姓になります。そして、元和9年(1623)には従五位下伊豆守に叙任されました。寛永4年(1627)には、1万石の大名に、寛永10年(1633)には老中となり、忍城主3万石を拝領。寛永14年(1637)におきた島原の乱を平定。寛永16年(1639)に川越に6万石で入封し、前年の大火からの復興を進めました。城を拡大し、曲輪を3ヶ所増設し、土塁や堀も新設しました。前領主から引き継いで東照宮や喜多院を復興し、その他の寺院、侍・代官・足輕屋敷を設け、町人町も再配置しました。

江戸からの復興資材の搬入のため、新河岸川に河岸を設け、物資輸送の大動脈が作られました。また江戸との迅速な連絡のため、川越街道と宿場を整備しました。後に息子である輝綱が馬で実測し11里1町の数値を得ています。(※江戸から川越の辻までの距離を「栗よりうまい十三里半」と表現したのは江戸時代末期の国学者斎藤月岑です。)

承応から明暦にかけての干害時に難波田村で飢えた人が出、馬も50~60匹死んだと聞き、信綱は、なぜすぐに知らせなかったかと家臣を叱り、三の丸に収容し、食事を与えよ、必要な金も貸し与えよと命じたといいます。凶作に備えて、楮、桑、茶などの換金作物の栽培を奨励、冬には田に水を貯えよ等の触を細かく出し続けています。

明暦の大火は明暦3年(1657)、3日間で江戸の大半を焼き尽くしてしまいました。被害は江戸城、旗本屋敷770、大名屋敷160、寺社350、橋60、倉庫



松平信綱の墓(平林寺)

9,000、町400等、死者は10万人。大火直後の3月4日には大雪が降り、飢えと寒さで命をなくす人が増えたため、4大名に命じて粥を配らせ、3週間で幕府の放出粥米は6,000石でした。町人には16万両の復興資金を貸し出しました。大名には参勤の免除や石高に応じて10ヶ年返済の見舞金、また旗本御家人には拝領金を下賜しています。江戸城の再建に要した総工費は93万4347両、消費した米は6万7893石、天守は再建しませんでした。御三家の屋敷を江戸城外に移転し、万治元年(1658)には定火消を設置しました。延焼を防ぐため、ワラ、茅葺き屋根は禁止され、江戸中に広小路、火除地を設けました。火災を免れた隅田川東岸が開発され、寛文元年(1661)には両国橋が架けられました。

寛文2年(1662)3月16日、67歳で藩政・幕政に数々の実績を残して没し、岩槻の平林寺に葬られました(平林寺は翌年に新座市野火止に移転)。

参考文献

重田正夫 2015. 『シリーズ藩物語 川越藩』 現代書院
「榎本弥左衛門覚書」『川越市史史料編近世II』

市民学芸員のページ *このページは市民学芸員が原稿を執筆、編集しました。

難波田城 ちょっと拝見 みどころ紹介

古民家シリーズ⑤ 『油屋と揚げ戸』

金子家は、江戸時代から明治時代にかけて農業の傍ら「油屋」という屋号で油商を営んでいました。板戸を上^{なたね}に収納する「揚げ戸」はその時代の名残であります。

現当主、金子幸蔵氏によると、灯り用の菜種油を主に売っていたそう^{なたね}で、この油を搾り取るには大変な労力を要したとのこと^{なたね}です。

4代前の当主雪蔵氏は体力のある方で油商にむいており、旧金子家住宅が明治4年(1871)の建築ということは雪蔵氏全盛の頃の建物です。

「油屋」という屋号は今でも使用しており、金子家の飯台の蓋の裏側には「へ」に「油」の焼印が押されています。この飯台は当時、上棟式の投げ餅用に使っていたようです。

また、建物の土間と居間の位置が、多くの民家とは逆になっており、向かって左側に土間があります。これは「油商」として入りやすくするために通りに近い左側を入口にし、かつ、商家で用いる「揚げ戸」を設けたのではないかと、とのことでした。(細田福三)



飯台の焼き印(拡大)



旧金子家揚げ戸(左)

おもしろ・なつかし体験⑤

ナイフで削ろう

このコーナーは、難波田城公園での体験学習やイベントの紹介・報告・参加者の感想などを取り上げます。

桜満開の4月2日(土)に「ナイフで削ろう」が約3年ぶりに実施されました。

最近は大変危険との理由から、子供たちが刃物を使う機会はほとんどありません。

この体験も刃物を扱うにあたり、ベテランスタッフを揃えて準備万端です。

今回は、びわの小枝や割りばしを削ります。

ナイフは折りたたみの肥後守^{ひごのかみ}ナイフ・切り出しナイフ等を用意しました。

左手で小枝を、右手でナイフの柄を握り、刃を小枝に当て左手の親指で刃の背の部分を押して削

ります。

ナイフを初めて使うという小学生の女の子は一生懸命に集中して、力が入っているため「指が痛い」という声も。初めはぎこちない動きの刃が、市民学芸員さんの指導でスムーズに動きだすと楽しそうな表情です。

そして、削った小枝に墨汁をつけて名前を書いてみました。

今回参加は8組。子供たちと一緒に、「ごぼうのささがきみたい」となかなかの腕前のお母さんなど、親子や祖父母と孫など、世代をまたいで楽しんでいただきました。(横溝敦子)



人の創ったもの★人の使ったもの

富士見の竹かご作り

企画展『ほうきと竹かご

—自然素材の生活用具—

プラスチック以前の生活用具

3/12～6/19

開催中の企画展では、自然素材を利用した生活用具「ほうき」と「竹かご」を紹介しています。1960年代に石油から作るプラスチック製品が普及するまでは、身近な自然素材を利用したものがほとんどで、作る現場も身近にありました。縄やムシロなどのワラ製品は自分たちが作り、畳たたみや桶おけ、ほうき、カゴなどは修業で技を習得した職人が作りました。前号のほうき作りに続き、今号では竹かご作りについて紹介します。

竹の特性と利用方法

竹は温暖で湿潤な日本の気候に適しているため、ごく寒い地方をのぞき、どこにでも見られます。竹には、成長が早い、軽い、抗菌作用があるなど優れた特性があるため、古くから利用されてきました。いちばん身近な竹の道具はカゴやザルで、「籠屋」ともよばれる竹かご職人が作りました。富士見市域でいつから竹かご職人がいたのかを明確に示す資料はありませんが、江戸時代にはいたようです。

大物師と小物師

竹かご職人には大物師おおものしと小物師こものしがありました。大物師はおもに大型のもの、ショイカゴ(畚などを運ぶ)やクズハキカゴ(堆肥にする落ち葉を運ぶ)などを作り、小物師は小型のもの、コメアゲザル(餅つき等で洗った米をあげ、水を切る)やアンコシザル(餡をこす)などを作りました。

竹かご職人

橋本能蔵氏よしぞう(故人)は、大正7年(1918)に下南畑地区しもなんばたに生まれ、竹かご職人だった父親の下で12才から修業を始めました。指導は厳しく、「教えるよりモノサシでピシッとやられた」そうです。

仕事の手始めは、ダンゴなどの串割りでした。

このコーナーでは、当館所蔵の資料を紹介します。今では使われなくなったものからわたしたちの身近な歴史をひもといてみたいと思います。

串の断面は、ダンゴは四角、焼き鳥は丸、蒲焼きは平たい、と異なるので、続けるうちに竹の戸割り(必要な幅に割り分ける)とヒゴ裂き(ヒゴ裂きが上達したそうです)が上達したそうです。親方の口癖は「つくり3年、ヒゴ裂き8年」、ヒゴ裂きの大切さを教わりました。

14才になると、駒林(ふじみ野市)のカゴ屋に奉公し、その後独立しました。終戦前まで下南畑で、戦後は水谷東でカゴ屋を営みしました。

竹かごの作り方

竹かご作りの手順は、

- ①竹の切り出し
- ②ヒゴ裂き(ヒゴ割り)
- ③つくり(編み)です。

竹は、10月～12月のキリ

シン(切り旬)に1年間分の材料を切り出します。一年物(ニイコ)は使わず、二年物か三年物を使用しました。作る製品の形や大きさを考え、ヒゴの太さ・形・本数を決めます。必要な長さに切った竹を「サスガ」というナタで割った後、ヒゴを作ります。ヒゴが用意できたら、編みます。

市民に伝わった竹かごの技

昭和62年(1987)、市立考古館(資料館の前身)が橋本氏を講師とした竹かご作り講習会を開催しました。翌年には橋本氏と受講生有志により「資料館友の会竹かご部会」が発足し、月2回の活動が始まりました。橋本氏は平成6年(1994)に体調を崩されるまで、大多数が初心者の主婦である会員に惜しみなく技を伝えました。翌7年から竹かご部会が講習会の講師となり、現在までさらに新しい人に技を伝え続けています。(駒木敦子)



メカイを編む橋本氏
(1998年撮影)



メカイ(高さ28cm)
用途は里芋の泥洗いや草
つみなど。職人の腕が評
価される基本の竹かご。



ハチホンバサミ(高さ78.5cm)
落ち葉を運ぶ大型のクズハキカゴ

＊ ＊夏のイベント予定＊ ＊

●ゆかた着付け教室

着付けと帯結びを覚えます。
 とき／6月25日(土)午前10時～正午
 会場／講座室 対象／中学生以上
 定員／15人(無料・申込順)
 指導／和道文化着装協会
 申込み／随時、電話または窓口で

●じゃがいも掘り

とき／6月26日(日)午前10時～正午
 集合場所／旧金子家住宅前(畑は公園の隣です)
 定員／30組(申込順) 参加費／1組1000円
 主催／難波田城公園活用推進協議会
 申込み／6月4日(土)午前9時から電話で

●竹かご教室

「パンかご」を作ります。
 とき／6月19日(日)午前9時半～午後4時
 会場／講座室
 対象／中学生以上
 定員／10人(申込順、初参加優先)
 参加費／1000円
 指導／資料館友の会竹かご部会
 申込み／6月1日(水)～8日(水)に電話で

●糸つむぎ(糸車)体験

とき／7月28日(木)、8月4日(木)、8月11日(木)
 午前10時～正午、午後1時～3時
 (体験は5～10分程度)
 会場／旧大澤家住宅 対象／子ども～大人
 指導／資料館友の会木綿部会

●ふるさと体験「藍の生葉染め」

藍の葉で絹のストールを染めます。
 とき／7月30日(土)午前9時30分～正午
 ※雨天の場合は31日(日)に延期
 会場／旧金子家住宅 材料代／2000円
 定員／10人(申込順、初参加優先)
 指導／河野悦子氏(染色愛好家)
 申込み／7月1日(金)～5日(火)に電話で

●子ども裁縫教室

縫い物の基本を習い、作品を作ります。夏休みの宿題にも！
 とき／8月3日(水) 午前10時～午後2時
 会場／講座室
 対象／小学生～中学生 ※小学2年以下は保護者同伴
 定員／15人(申込み順) 参加費／200円(材料代)
 作品／どちらかを選択
 きんちやく袋(初心者向け)
 ミニバッグ(経験者向け)
 指導／美楽の会
 申込み／7月1日(金)午前9時から電話で

●夏休み古民家宿泊体験

古民家に泊まって、昔の暮らしを体験しよう！
 とき／8月6日(土)午後1時～7日(日)午後2時
 内容／竹細工(コップや箸)、手打ちうどん作り、ごえもん風呂、七輪で焼き魚など
 対象／市内在住の小学4～6年生
 定員／16人(申込順) 参加費／1500円(材料費・食費)
 申込み／7月2日(土)午前9時から電話で

●早朝の蓮を見学できます

蓮が見ごろを迎える、6月18日(土)～7月18日(祝)の土・日・祝日は、午前6時に開園します。なお、資料館や古民家は通常どおり午前9時開館です。

●ちよつ蔵市(難波田城公園活用推進協議会主催)

6月26日(日)ふかしいも
 7月24日(日)流しそうめん
 8月はお休みです。

※他にも様々なイベントがあります。各イベントの詳細は、広報ふじみやポスター、チラシ、公式サイトなどでお確かめください。

田舎まんじゅう販売
 第1、3日曜日 10:30～
 お月見亭(予約制手打ちうどんランチ)
 第2火曜日 11:30～13:30



早寝・早起きで
元気な夏を！



難波田城
FUJIMI MUNICIPAL MUSEUM

編集・発行／富士見市立難波田城資料館

〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑 568-1 Tel. 049-253-4664 Fax. 049-253-4665
 富士見市役所公式ホームページ <http://www.city.fujimi.saitama.jp>

◆資料館休館日／月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(土・日・祝日を除く)、年末年始 開館時間／午前9時～午後5時
 ◇公園休園日／なし 開園時間／午前9時～午後6時(4月～9月) 午前9時～午後5時(10月～3月)